

農技セ第4501号

平成25年4月12日

各関係機関長 殿
病害虫防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター

病害虫防除所長
(公印省略)

平成25年度技術情報について

平成25年度技術情報第1号を發表したので送付します。

平成25年度技術情報第1号

平成25年4月12日

徳島県

ビワキジラミの発生状況と防除対策について

昨年5月、徳島市、小松島市、阿南市、勝浦町と佐那河内村でビワに寄生するビワキジラミが初めて確認され、本種が寄生した樹では果実や枝葉に幼虫が排泄した甘露が付着し、これにすす病が発生する被害が発生しました(写真1)。その後、当該発生地域に加え周辺の地域での発生が見られたことから、被害の拡大が懸念されます。本種は未記載種であることから生態の詳細は、明らかになっていません。

このような中、平成25年4月10日付けでビワキジラミに対する殺虫剤が適用拡大されました。

つきましては、本種の被害および発生拡大を防止するため、発生状況の把握に努めるとともに、防除の徹底を御指導ください。

1 発生作物：ビワ

2 発生の状況

- 1) 昨年初夏の調査では、発生地域は徳島市、小松島市、阿南市、勝浦町と佐那河内村であったが、その後、本年3月の調査では、神山町、鳴門市、上板町と石井町でも発生が確認された。
- 2) 冬期の調査において、主に花雷(幼果)やその周辺で卵、幼虫、成虫の各生育段階が見られた(写真2、3)。
- 3) 5～6月、成虫は主に葉裏の葉脈(特に主脈)に沿って寄生する(写真4)。
- 4) 幼虫は果梗や新梢の枝部、芽鱗の下などの隙間に多く寄生し、排泄物(甘露)を出す。また、終齢幼虫は腹部後方から白い蠟物質を排出する(写真5)。

3 防除対策

- 1) 葉裏に寄生した成虫、終齢幼虫が排出する白い蠟物質やすす病の発生を目印として、早期発見に努める。
- 2) 発生園、発生樹では登録薬剤(表1)による薬剤防除を行い、密度低減を図る。なお、有袋栽培の場合は、袋かけ前に薬剤防除を行う。

表1 ビワのビワキジラミに登録された防除薬剤

薬剤名 (有効成分名)	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数 (本成分を含む農薬の総使用回数)	使用方法	毒性
スカウトフロアブル (トラロメトリン)	2,000倍	200~700リットル/10a	収穫3日前まで	3回以内	散布	劇



写真1 多発生樹でのすす病 (5月)
(終齢幼虫が出す白い蠟物質が見られる。)



写真2 果実袋内で発生したビワキジラミ (5月)



写真3 冬期の新梢に産み付けられた卵



写真4 冬期、蕾上の成虫



写真5 成虫の群集 (5月下旬)



写真6 終齢幼虫 (5月)
(腹部後方から白い蠟物質を排出)

注：写真4, 5, 6は(独法)農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所 井上広光主任研究員提供